

ピーマン疫病に対する疫病耐病性台木の防除効果		
[要約] 疫病耐病性台木3品種は、慣行のり病性ピーマン品種と比べて発病が少なく、特に「台パワー」は強い耐病性である。		
農業総合センター鹿島地帯特産指導所	成果区分	技術情報

1. 背景・ねらい

鹿島南部地域のピーマン産地では、定植後の生育初期から中期にかけて立枯れ性病害が発生し、その多くから疫病菌が分離される。そこで疫病耐病性台木品種について、防除効果を明らかにする。

2. 成果の内容・特徴

- 1) 土壌が過湿な発病助長環境下のポット試験では、いずれのほ場とも対照品種の「みおぎ」(り病性)と比較して、疫病耐病性台木品種の枯死株率は低く、特に「台パワー」が顕著に低く、強い耐病性が認められる(表1)。
- 2) 枯死した各品種からは疫病菌が分離され、ピーマン苗「みおぎ」の地際茎に接種すると病原性を示す(データ略)。
- 3) 現地ほ場において、「スケットPX」接木苗は枯死するほ場があるものの、「バギー」、「台パワー」接木苗での発病はなく、強い耐病性が認められる(表2)。

3. 成果の活用面・留意点

- 1) 接木苗(チューブ接ぎ)は、自根苗と比較して半促成栽培で25日程度、抑制栽培で17日程度育苗期間を長く必要とする。
- 2) 穂木に「みおぎ」を接木した場合、樹勢は「スケットPX」では自根と同程度であるが、「バギー」および「台パワー」はやや弱くなる傾向がある。
- 3) 現地ほ場においては高い防除効果が認められるが、極端な土壌水分過多では発病する可能性がある。また、還元型太陽熱土壌消毒など他の防除と組み合わせて接木苗を利用する。

4. 具体的データ

表1 立枯れ性病害に対する発生助長条件における疫病耐病性台木品種の発病抑制効果（ポット試験）

年度	ほ場	品 種	発 病 株 率		
			1週間後	2週間後	1ヵ月後
H21	A	バギー	0 %	0 %	0 %
		スケットPX	0	0	0
		みおぎ(対照)	0	0	11
	B	バギー	6	11	67
		スケットPX	22	39	100
		みおぎ(対照)	94	100	100
	C	バギー	0	0	0
		スケットPX	0	0	27
		みおぎ(対照)	0	25	33
D	バギー	0	0	0	
	スケットPX	0	0	0	
	台パワー	0	0	0	
	みおぎ(対照)	0	33	61	
H22	E	バギー	0	0	11
		スケットPX	0	0	6
		台パワー	0	0	0
		みおぎ(対照)	0	89	89
F	バギー	0	0	0	
	スケットPX	0	0	0	
	台パワー	0	0	0	
	みおぎ(対照)	0	0	11	

立枯れ性病害発生株直下の土壌を現地から採取して 36 穴連結ポットに充填し、本葉 4~6 枚の各台木品種及びピーマン「みおぎ」の 200 穴セル苗を移植した。移植後に土壌水分過多の発病助長条件下に置き、枯死株率を調査した。

表2 現地ほ場における疫病耐病性台木の効果（枯死株／定植株）

年度	ほ場	作型	補植	バギー	スケットPX	台パワー	みおぎ(自根)
H21	A	半促成	2月中旬	0 / 5	0 / 5	— ^{a)}	—
	〃	抑制	8月中旬	0 / 10	0 / 10	0 / 10	—
	C	半促成	2月中旬	0 / 10	0 / 5	—	—
H22	D	半促成	2月下旬	0 / 3	0 / 3	0 / 3	8 / 9
	F	半促成	2月下旬	0 / 15	0 / 15	0 / 15	27 / 45
	G	半促成	2月下旬	0 / 3	0 / 3	0 / 3	6 / 9
	H	抑制	7月下旬	0 / 2	4 / 4	0 / 3	5 / 9

立枯れ性病害が発生した場所に各台木の接木苗を植え、立枯れ性病害の発生状況を2~3ヵ月後に確認した。「みおぎ」自根苗は 200 穴セル成型自根苗を各台木と同じ場所に植え、同様に調査した。

A、C、D、F はそれぞれ表1と同じほ場。

a) —: 未実施

5. 試験課題名・試験期間・担当研究室

ピーマンの立枯れ性病害の防除法の確立・平成 21~23 年度・鹿島地帯特産指導所